

郷土博物館・文学館だより

現在、渋谷駅周辺では大規模な再開発が行われ、駅の形は大きく変わりつつあります。しかし、駅とその周辺が現在のような形に発展した背景に、道玄坂・宮益坂を結ぶ大山街道の存在があったことは、ほとんど注意されていません。今回の展示では、大山街道という切り口から、渋谷駅の形成過程を紹介しています。

江戸時代の道玄坂を描いた絵画、玉電・都電の行先板、青山車庫で発掘されたレール、昭和39年頃の渋谷駅東口付近ジオラマなどの資料を通して、駅とその周辺の長い歴史を感じていただければと思います。



特別展

渋谷駅の形成と大山街道

1月21日まで
開催中！



昭和42年 渋谷駅東口の都電と地下鉄銀座線 (松井一彦撮影)



12月2日の展示解説風景

鶯谷でみつかった弥生時代の住居跡

「鶯谷」というと、多くの方はおそらく山手線の「鶯谷」駅、台東区の「鶯谷」をすぐに連想されたのではないのでしょうか。実は、渋谷区内にも「鶯谷町」という地名があります。渋谷駅と代官山駅を線で結ぶと、ちょうど真ん中ぐらいのところですよ。

今から約 10 年前になりますが、この鶯谷町で大規模な再開発事業が計画されていました。その場所はもともと鶯谷遺跡（渋谷区No.46 遺跡）として知られていましたので、試掘調査が実施されました。その結果、たくさんの縄文土器片のほか住居跡なども多数確認され、本格的な調査をする運びとなりました。

調査は平成 19 年（2007）6 月からはじまり、その年の 12 月まで、約半年かけて行われました。その結果、まず縄文時代では竪穴住居跡が 77 軒、土坑などが 35 基、屋外焼土跡が 10 基のほか、ピット（穴）などの遺構が多数確認されました。さらには弥生時代の竪穴住居跡が 27 軒、掘立柱建物跡が 4 棟確認されました。このように鶯谷遺跡の発掘調査（第 1 地点）は、渋谷区内の縄文・弥生時代の遺跡調査としては、かつてないほどの多大なる成果をあげることができました。

右の写真は、その時確認された弥生時代の住居跡のものです。第 67 号住居跡で、平面形は胴の部分が少し張っている隅丸長方形をしています。長軸 4.55m×短軸 3.5m×確認面からの深さ 0.38m を測り、住居跡の主軸は真北から西に 18° ほど傾いていました。また、住居の東側半分は、残念なことに後世の埋設管の工事によ

り壊されていました。

ピットは 5 本検出され、そのうち 4 本は柱を立てるための柱穴、残りの 1 本は住居の入口施設に伴うものと考えられています（住居の南西端にあるものは貯蔵穴）。

また住居の床直上から炭化物や焼土が多量に検出されました。おそらくこの住居は火災にあったようです。遺物は、弥生時代後期の壺や台付甕（かめ）などが 2 本の柱穴のそばから、ほぼ床面に設置された状態で見つかっています。土器は被熱により器面の剥落が著しく、火災時の熱の強さを物語っています。

遺物で注目されるのは、写真の左側手前の柱穴のそばにあった遺物です。一つはほぼ完形の壺で、いわゆる「久が原式」といわれるものです。もう一つは広口壺に、台付甕の脚部をとって底に穴が開いた状態の土器を、上から重ねたものでした。広口壺に水を入れ、蒸し器のように使用したのでしょうか。突然（？）の火災により、当時の道具の使い方がわかった事例といえるかもしれません。



第 67 号住居跡全景（南から撮影）

渋谷出身の歌人・小野茂樹

昭和11年(1936)12月15日、東京市渋谷区宮代町(現・渋谷区広尾)に生まれた小野茂樹は、昭和30年に早稲田大学文学部国文科に入学、早稲田大学短歌会に入会すると共に、短歌結社「地中海」に参加し、主宰の香川進に師事します。昭和38年に大学を中退、角川書店に編集者として勤務し、在学時代に所属していたコーラスグループで知り合った女性と結婚しますが、翌年別居、2年後の昭和40年には離婚します。また同年、角川書店から河出書房新社に転社しました。

昭和41年に青山雅子と再婚します。雅子との出会いは二人が13歳の頃、東京教育大学附属中学校の同級生としてでした。「年譜」(『黄金記憶』収録)には、小野15歳の時に「青山雅子を愛するようになる」と記される一方、「秋、青山雅子が結婚を決意」(昭和30年)、「2月、雅子が離婚、青山姓に戻る」(昭和40年)とあります。この記述から、二人の絆は一旦は断ち切れたものの、約10年後に再び結ばれたであろうことが推定できます。

昭和45年5月7日、小野は交通事故により33歳で夭折します。長女綾子が誕生して一年、歌人としても編集者としても、これから益々の活躍が期待される中での訃報でした。

小野茂樹名義による歌集は、昭和43年の『羊雲離散』と、小野の死後に刊行された昭和46年の遺歌集『黄金記憶』のみ存在します。前者は代表歌のひとつ「あの夏の数がぎりなきそし

てまたたつた一つの表情をせよ」や「路に濃き木立の影にむせびつつきみを追へば結婚飛翔(ナプシャル・フライト)にか似む」などの相聞歌を数多く収録、抒情性・愛唱性に富んだ歌集として評価され、昭和44年に第13回現代歌人協会賞を受賞しました。一方、後者は「くさむらへ草の影射す日のひかりとほからず死はすべてとならむ」「明けそめてシャーラザッドの物語途切るるころか逝きたまふなり」など、死を想起させる歌が随所に見られます。両歌集に収録された短歌の特徴として、風景の陰影に自らの心情を重ねて表現した歌が多い点が挙げられます。

前衛短歌運動が盛んだった昭和30年代、小野は三十一文字という短歌の定型を極力崩さなかったといわれます。『羊雲離散』の「おぼえがき」に記された「ぼくは短歌に自己抑制を課しすぎているかもしれぬ。表現における際のリズムは、増幅器とはならず整流器としてはたらいていることが多く(中略)ぼくが短歌に求めるのはみずから断念を強いる明快な仮説である。」という言葉が、小野の短歌に対する姿勢を最も端的に表現していたと考えられます。

『現代歌人文庫21
小野茂樹歌集』
国文社
昭和57年(1982)



収蔵資料紹介

世界最小のマイクロテレビ

TV5-303

(昭和38年製)



昭和28年(1953)2月1日テレビ放送が開始されると、それに合わせ、白黒テレビが販売されました。この頃のサラリーマンの平均月収が、1万5千円なのに対し、当時14型のテレビは、20万円程もしたため、テレビは多くの人には憧れの電化製品でした。

昭和30年代半ばになると14型が5万円前後となり、ようやくテレビは普及します。

さらに、昭和35年にはカラー放送が開始され、カラーテレビが売れ出されます。ただ、21型が50万円を超えたため、一般家庭への普及は昭和40年代初め頃となります。

そうした流れの中で、昭和37年にソニーが、当時世界最小・最軽量(白黒)テレビを5万2千円で発売しました。

それまでのテレビは、家族で茶の間に集まり見るものでし

たが、このテレビは新たな時代を見据え、個人向けとして開発されました。そのため、車でも見られるように振動実験なども繰り返行われました。

これは、8型サイズのポータブルテレビですが、世界初のオールトランスistorのテレビです。真空管を使わず、トランスistor化したため、軽量となり、消費電力も小さくなりました。さらにそれまでの真空管では、スイッチを入れてから立ち上がるまで時間がかかりましたが、そうした時間も無くなり当時としては画期的でした。

このテレビは世界に大きな驚きを持って迎えられ、メーカーも積極的に海外展開したこともあり、大量に輸出されました。その後、これをきっかけに小型テレビは日本の得意分野と広く認識され、輸出用に多く生産されました。

【今後の展示予定】

◆特別展「渋谷駅の形成と大山道」

～平成30年1月21日(日)

◆企画展「道具のかたち—区内出土資料からみた道具のいろいろ—」

平成30年1月30日(火)～3月25日(日)

◆企画展「第18回渋谷現代短歌優秀作品展」

平成30年4月1日(日)～4月8日(日)

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 11:00～17:00 (入館は16:30まで)

休館日 ◆ 月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※ 内は10名以上の団体料金

※ 60歳以上の方、障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.36

平成29年12月20日発行